

8—いのちいよいよ甦る^{よみがえ}

(1) 行事は秀れてリハビリ

人間が欲求の束であることはすでに述べたことであるが、人間の欲求は環境からの刺激によって動き、努力してそれを満足させる。また、逆に環境に働き返して環境を変えていく。その交互のくりかえしが人間の生活である。刺激がなくなったり、それを感じる力が弱くなると、働き返す力もしだいに失われ、生きて益なき者と自らを感じるようになる。老衰期に入ると、生きんとするはりがしだいに色あせてくる。

その上、老人ホーム生活は老人をいっそう抑制的にするし、無気力にする作用をもっている。だから、依存的消極的にし、感動性も弱くなる一方である。いわゆる重度の施設病にかかっていく。しかし、集団は弊害のみをもっているのではない。集団は集団特有の教育的作用をもっており、ホーム生活でこの作用を老人のために活用重視することを怠ってはならない。集団生活を単に管理



面のみでみて、その教育性を見失っているホームとそうでないホームとは、老人の動きの上に一目瞭然の差異が見られるものである。

集団生活はほっておいてもその教育的作用を個々人に及ぼすものである。病院や家庭で過保護のごとく寝かされていた老人が、特養ホームに入ってくると、多くの者が数日もしないうちに自力で歩き始め、やがておむつも外れてくるようになる。一見して自分よりも重い障害の老人でも自力で動く努力をしているのを見せつけられるからである。ひとのふりを見てわが身を顧みざるをえないのである。

しかし、集団生活の教育的効果を計画的に進めるところに、ようやくホームとしての存在理由が示されてくる。いわゆるグループ活動であり、行事活動である。集団であればこそ、グループがつかられ、行事がもたれ、単調なホーム生活に程よい刺激が与えられる。

寝たきり老人は寝たきりにしておくのが一番の処遇である、という施設人が案外多いことに驚かされるが、それは論外としておこう。ただ、特養でのリハビリテーションについて、機能を積極的に回復する医学的な面を重視する立場と、今残っている機能を維持さすことに重点をおく立場の二つが対比させられている。

任運荘は後者の立場をとっている。小規模施設であるため特にリハビリ担当者をおく余裕もないが、看護婦寮母の日常介護作業の中の一つとして進められているだけである。特養でのリハビリは、

しかし、身体的なものだけでなく、身心一体的にとらえるのでなければ効果は少ない。むしろ、心
を明るくかきたてることを優先して、身体が心に沿うて動くというのが、老衰期老人にとってふさ
わしい。心のない介護が殺伐であるように、ここでも、心のないリハビリは苦痛でさえあろう。

だから、任運荘の寮母たちは心身を楽しく動かす行事を重要と考えている。行事をホームにおけ
るリハビリとして捉える。老人ホームによっては目まぐるしい日課と行事の連続で、かえって老人
を施設病に追いやっている場合もあるが、行事はあくまでも程よいかげんでなければならぬ。行
事の翌日は疲れでなく、晴れやかな空気がそよぐ程であるのが理想的である。嘱託医が週一回回診
をするが、「昨日は何かあったのか、老人たちの顔が何かいつもより生き生きしている」と問うこ
とがある。行事は身心の全体的なりハビリテーションである。

石神重信氏の最近の論文「老人福祉とリハビリテーション」(『80年老人福祉年報』・全社協)は特養
入所老人の日常生活動作と寮母の意欲、したがってホームの行事の活発さとの関連を明らかにして
いる。要約して引用する。

「入所老人の機能に施設間格差が大きい。機能のよい施設は、すべてに高得点を示している。例
えば、特養老人の移動機能(歩行)の状況からみた排泄動作を比べると、高成績のA施設と低成績
のB施設とでは大きく差がある。動けないのでベッド上で生活をしている老人だけを比較すると、
A施設では六三%がおむつ使用で、ポータブル便器を使用して自立しているのが二二・八% 便器

で介助をうけているのが一四・八％。それに対してB施設では全員がおむつにくるまっている。さらに、部屋内を歩ける者以上の歩行可能者の中で、B施設では一八％もが排泄介助をうけている。A施設ではそれが四・三％にすぎない」。

なぜそうなっているか。報告者の石神氏はこう説明している。

「二つの施設間の行事や寮母指導員の意識に明らかな差がみられている。

まず、行事について。A施設では十一月を除いて毎月一回の行事がもたれ、その外に毎月の誕生会、毎月保育園児との交流、毎月の仏教講話、八～九月のボランティアによる商店街散歩等多様である。それに対してB施設は四月の有志だけの花見、十二月の忘年会、クリスマス会、そして毎月の誕生会。たったこれだけの行事しかなされていない。余りにも静的である。

つぎに、両施設間の職員の意識と身体的変調と平均年齢の差があげられる。

「仕事の中でうれしいこと」では、老人との精神的接触——Aは七四・一％、Bは一四・三％。

老人の機能向上——Aは三三・三％、Bは〇。無回答——Aは七・四％、Bは六四・三％。

「つらいわずらわしいこと」は何かと問われて、精神的ケア——Aは二二・二％、Bは〇。肉体的ケア——Aは〇、Bは一四・三％。無回答——Aは一・一％、Bは三五・七％。

「身体の変調」では、腰痛——Aは二五・九％、Bは六四・三％。その他の痛み——Aは二・七％、Bは三五・七％。

平均年齢では、Aは三七・三歳、Bは四五・六歳。

入所者に働きかける方法と熱意に明らかにAとBとでは差があるし、意識でも職員の受身的な態度がB施設で著しい」。

任遇荘の行事

行事やグループ活動が連続するホーム生活はいかにも施設生活らしく空虚であろうし、B施設のように行事らしいものさえない生活も退屈である。傍から見れば老人は完全に受動のように見えようと、能動が底にひそんでいることを寮母はよく知っている。だから、任遇荘の寮母は労をいとわず行事を自発的に計画する。それだけに結果的には無理のないものとなっているので、老人と寮母の一体感は盛り上ってくる。

行事に参加することで、老人は集団の中の孤独より解放され、集団所属の欲求が充たされる。いったんは捨てたはずの「世間」が甦ってくる。長年忘れ去っていたものが老年の心に復活する。だから、年も我も忘れて、全身をゆすって歓喜する。青空の下で心はいやが上にも開かれる。緑の山河に追想は湧くがごとくあふれ出る。折々のおせち料理に眼を輝かして祝福される自分に満足する。拙い表現活動にひそかに満足し、また、くよくよと思い悩む。こうして豊かなりし日のことを想い今をさらに生きんと願う。「風たちぬ われ生きめやも」ひとりそう思う日もある。

先にみたように、生きることば願うことであった。折々の行事は内なる願いをかきたてていく役を担うのである。

表5 寮母・看護婦の業務一覧表

	寮 母		看 護 婦
年 間	4月	A・D・L表作成, 老人介護相談開始	第1回利用者健康診断
	5月	機関紙作成, 大掃除	職員健康診断
	6月	研修会(九州大会)	
	7月	緊急看護法実習(郡立病院長)	
	8月	機関紙作成, 大掃除	心臓疾患者のみE・K・G
	9月	利用者家族との懇談会	
	10月	A・D・L表作成, 研修会(全国)	第2回利用者健康診断
	11月	機関紙作成	
	12月	一年間の反省, 大掃除	心臓疾患者のみE・K・G
	1月	互礼会	
	2月	機関紙作成, 研修会(県)	
	3月	緊急看護実習, 大掃除	
月 間	○ケース検討会…第2, 第3木曜日 ○寮母会議…第1, 第4木曜日		○体重測定 ○便尿器消毒 ○スリッパ消毒
週 間	日	戸外活動	
	月	入 浴	定期投薬日
	火	個人別リハビリ・福祉講座	福祉講座
	水	入 浴	定期投薬日
	木	衛生検査	ケース記録整理
	金	入 浴	全員血圧測定
	土	買 物	回 診

表6 利用者の行事(年, 月, 週間)

月	年 間		理事長と利用者の話し合い						
4	花見・花祭・一泊旅行	月	……第1火曜日						
5	開設記念日・母の日		誕生会……第3日曜日						
6	父の日		命日祭……第1水曜日の午後						
7	七夕・ソーメン流し	間	短歌会……最終日曜日						
8	盆帰省・盆供養・盆踊り		反省会……30日						
9	敬老の日・十五夜・一泊旅行		火災避難訓練……随時						
10	運動会	曜日	日	月	火	水	木	金	土
11	文化祭	週	○戸外活動	○入浴	○個人別リハビリ	○入浴	○クラブ活動	○入浴	○買物
12	クリスマス・餅つき・正月帰省								
1	新年互礼会								○回診
2	高齢文化創作美術展(県)	間					○誕生日		
3	ひな祭・彼岸供養								

前頁の表は職員の日々の作業内容と各行事と組合せたものである。任運荘の日課に縛られない自由な暮らし、と説明されても、老人にとってめまぐるしい日々であると映るかもしれない。任運荘では参加はすべて老人の自由意志にまかされており、また、職員はその決定を手助けするだけである。だから、職員はたしかに多忙である。しかし、それと同じように老人が多忙に過ぎることではない。すべてが老人の自由意志だからである。しかし、日課や行事の緩やかな流れに参加して、それなりに多忙であることが、特養の人びとをその不安から免れしめているのである。

死への不安が計り知れないほど深く、絶えずつきまとうているのが人間の晩年である。とくに、特養での生活は死を伴侶としているようなものである。間違いなくここは「死の待合室」である。だから、かりにここが病室のごとく静養することのみがあるとするとするなら、老人たちはたちまちにして死の観念に包まれてしまうであろう。不安の虜（とりこ）になってしまいうに違いない。

(2) 最後の運動会になるかも

秋の体育大会は日本人の心に幼年期から刻まれる生涯に消えない風物詩である。それだけに特養での運動会は、幼き日への郷愁と共に、生への感動が渦まき、衰えと死を前にしての生の意識でもある。これが最後の運動会になるかもしれないと思いつつ参加する老人も多く、秋空の下にかもしだされる雰囲気は特別に胸打つものが漂う。

五十三年の運動会は三回目であるが、新しくできた重度身体障害者療護施設「騰々舎」との合同となったために、人数も倍加して、皆の心は沸騰した。参加したある女性ははかしくもカナタイプで心を表現する途を残しているが、「障害者になったことを後悔しない」といつている程である。その時の詳しい描写を『にんうん荘』（20号・53・11）に見よう。

今年で三度めの運動会は「騰々舎」と合同です。

十月十日。理事長挨拶。「ここは最も障害の重い人たちの運動会です。見て下さい。最重度の生野アツ子さんを。ストレッチャーの上で白い鉢巻を締め、お父さんに付添われて参加しています。二つの施設をくっつけて本当によかったと思います。ここが皆の楽園になるようみんなで努力していきますよう」。

奇声をあげる子をしっかり抱く母は、運動会に参加したことのない子の手を握って涙をこらえています。「ありがたいことじゃ」とつぶやく白髪の倉原モカさんは、この間までは生死の間をさ迷っていた人です。アツ子さんのお父さんは途中で感激を入院中の奥さんに電話しました。「アツ子かね、運動会に参加しているんだよ。白い鉢巻をしめてね」。生まれて二十三年間寝たきりのわが子が運動会に出る。

いよいよ競技が始まります。任運荘四十名、騰々舎三十七名、家族百名の参加です。選手宣誓もあります。フラダンスの競技では腰に風船をつけ手を使わず腰で割るのですが、とても難しい。後

藤アキさんは亡くなった息子さんのことも家のこともすっかり忘れ、歓声をあげて相手の風船を追っかけます。

マラソンは父兄と職員との競争ですが、若い障害者の応援が大変なもの。騰々舎の職員が一等でゴールインすると、椅子をたたき腰を振って嬉しさを表現します。「大島育ち」の競技です。車椅子で寮母に付添われた選手たちが大島娘よろしく紅白の輪を頭にしてボールを乗せて運びます。真部さんは今日はトレパン姿です。入所した時は意欲がなく一時は危篤状態にもなりました。孫たちから「頑張って」と小さな手で背中を叩かれ、照れくさそうにしています。

「玉送り」は全員参加。寝たきりの人も出場です。控え席がそのまま競技場になります。できない人には後から寮母がそっとカバーしています。安松さんは玉が送られてくると体全体を堅くし、玉が去るとホットします。表情のない安松さんでも周囲のざわめきに応じて微かな変化をみせるのです。

参加者全員を涙の出るほど笑わせたのが美人コンテスト。両施設の選手が理事長たちをモデルに靴をはかせるのもどかしく、衣装をつけお化粧すると、白いウエディングドレスの花嫁さんができ上り、ワッと歓声があがります。若い丸山君は「オモシロカタノハナヨメサン」何度も繰り返します。

紅白の勝負を盛り上げたのは何といっても綱引きです。父兄と職員との競技ですが、利用者の応援は大変なもの。羽田野幸夫さんは体のぐあいが悪く出場していなかったが、最後の綱引きになって

「運動会は来年までないと思ったら我慢できなくなった。負けて尻餅ついてしまうた」と大声で話しています。鈴割りは全員参加。やっと一つの球が割れました。脳性麻痺のユミちゃんが「アー、アー」と嬉しさを叫んでいます。不自由な手で毎日切った紙吹雪が舞い散りました。最後のリズム体操で、音楽にあわせて体を動かす人びとの顔は、一つのことをやりとげた満足感に紅潮しています。

いよいよ得点発表です。中間発表で一点でも勝とうものなら歓声がどよめくが、負けると静まり返ってしまいます。結局、六五〇点の同点になりました。「それはないよ」「八百長だァ」思わぬ反論も上がります。澄みきった秋の一日、それぞれに想いを残して合同運動会は終わりました。

騰々舎の三浦志奈代さんは日記にこう書きとめています。「今日ほど素晴らしかったことはない。この施設に来てよかった。よい人に会うことは財産のような気がする。障害者になったことを後悔しない」。彼女は四年前幼い二人の子を残し、言葉を喪失し、下半身麻痺の苦悩の人生を生きねばならなかったのです。

今日の運動会もまた私たちにさらに大きな課題を示していると思えてなりません。

特養での運動会はそう珍しいことではないが、特養では参加する一人ひとりの役割りや心の動きを重視することであって、かっこよく進行させようといった集団の動きを余り問題にしない方がいい。

衛藤みつえさんは枕もとのユニホームを眺めて、入れ歯のとび出るのも構わず、「いつも赤組、勝ち勝ち……」と、昔覚えていた応援歌を口ずさんだり、当日になると朝食もそこそこに不自由な足を片方ベッドから下ろして行こうとする。

「皆に迷惑をかける、早く迎えが来ればよい」という羽田野みつ子さんに、選手宣誓をお願いした。「なぜ私のような者に、もっと健康な人がたくさんいるのに」と抗議していたが、積極的に広場に出て練習するようになる。当日寮母に車椅子を押されて前に出る羽田野さんは曲った背を伸ばし、はっきり宣誓する。寮母が彼女の右腕を高らかに上げると、静まっていた会場に一斉に拍手が湧き起こった。

「一時は植物人間化し生命も危ぶまれた衛藤允子さんははじめは無理だとされていました。行きたいという衛藤さんに逆に励まされて、運動会の空気を吸わせるだけでもと、布団のままストレッチャーに乗せて出たのです。万国旗に飾られた空をまぶしげに見上げ、ウツクシーナーと感嘆の声。宝探してはついに家族がストレッチャーを押し、参加させてしまいました。娘に宝物を渡されて泣き笑う衛藤さんに、老人たちをはじめ職員までも逆に勇気づけられてしまいました」(24号・55・1・1)。

やりようによっては絶対安静の者以外は運動会に参加することができるわけである。ふしぎにもその翌日は疲れよりも生き生きとした空気がホームの中に漂っている。

(3) 老人弁論大会もある文化祭

老い衰えた人たちの運動会と対照的に、精神的になお働きを残した人びとの文化祭が十一月に行われる。五十三年は三回めで弁論大会が加えられて、少し文化祭らしくなった。『にんうん荘』(21号・54・2・1)は伝える。

十一月二十六日は騰々舎と合同の文化祭です。

ブライバシーを守る意味でふだんは来客に消極的な任運荘も、この日は利用者や職員の家族をはじめ広く一般の人に開放し、ホームを見学してもらいます。弁論大会を中心に、作品展示会や家族との昼食会を兼ねた屋外パーティを計画しました。当日は昨日までの悪天候が嘘のように晴れ渡り来訪者の顔も心なはずんで見えます。

玄関前の広場では、厨房の職員が朝早くからタネを仕込んだ店が並び、町内のボランティアの若者たちがいせいのよい声をあげています。おでん、カレー、ぜんざい、だんご汁、おにぎり、お茶づけ、やきそば、やきとり、コーヒ、紅茶、甘酒等が用意されています。

集会室には利用者の手づくりの作品を展示。書、俳句、短歌、貼り絵、手芸。紫色のしぼりの踊り着も展示されています。これは昔覚えた技術を皆に伝えたいと、高山さんが老人十五名と共に生

地の染めつけから裁断、仕上げまで自分達の手で行ったものです。

でも、何よりも眼を奪われるのは室内に広がる秋の大自然です。中央に天井まで届く大きな風景画。それは老人達が野で摘んだ草花を押花にし、それを材料に使って描いたものです。寝たきりのMさんも喜んで身体の下に敷いてくれました。三週間後にMさんは永眠しましたが、彼女の布団の下から出てきた草花が鮮やかに画面を飾っています。^{注1}風景の回りには本物の柿やくぬぎが並び、スギがなびきます。枝々にはススキで作った梟や小鳥が飛び交います。カラス瓜の赤い実が垂れ、案山子を見え隠れさせています。ソバの実も大豆もあります。ソバは八月の暑いさ中、老人たちが種を蒔き水を注いで育てたもの、大豆も同じです。騰々舎の若い利用者は初めて見るソバの実を珍しそうに囲んでいます。

広場には音楽が流れ、皿を抱えて屋台を物色する人達で埋まります。騰々舎の人たちは両親に、任運荘のお年寄りには子や孫に手を引かれてテーブルにつきまします。ふつふつと温かい雰囲気の中にボランティアの協力もあって、混乱することもなく最後まで楽しむことができました。

午後の弁論大会では、身体は不自由でも自分の考えていることを大いに述べようと、百名の聴衆を前に、八名の老人が熱弁をふるい、騰々舎の三浦さんが寮母の代読による弁論で、皆の涙をさそいました。

仕事に追われてゆっくり老人の話を聞く余裕のない寮母が月一回のおしゃべり会を思いたちまし

たが、それがきっかけで弁論大会が考えられました。声を出すこともリハビリです。まして、大勢の前で順序立てて話すには大きな努力を要します。一人の落伍者もなくやれたことは、多くの老人にやればできるんだという気概を与えたようです。

そのうちの一人だけを紹介しよう。『死線を越えて』（工藤ティ 七二）車椅子の上から全介助の工藤さんは自分の内面を裸にします。

——私が手足の自由を失ったのは昭和四十一年十月でした。山に仕事に行く途中転倒したのです。医者から「頸骨を痛めているのでけん引をすればよい」といわれ、直ちにけん引しましたが、首は痛くなるばかりです。また、手術をすれば治るとの言葉に、一刻も早く治りたい一心から手術を受けました。

ところがある日食事中ボトリと箸を落としたのです。私は思わずお膳をつきとばしました。千尋の谷からつき落される思いでした。主人は箸がなければ食べられないのなら、わしが箸になるからと慰めてくれますが、私はその時から死を考え始めました。人のためにならず生きていくことは耐えられなかったのです。カミソリで動脈を切って死のうとしましたが、見つけれられ、捨てられてしまいました。それから一日に牛乳一本しか摂らず、次第に痩せ、死に近づくことを急ぎました。

ところが、その頃福祉事務所のKさんの紹介でこの任運荘をお世話されたのです。私は家を出る時泣きました。辛抱して五人の子供を大学にやり、主人にもできるだけのことをしたのに、何故私

をうば捨て山にやるのかと。しかし、やがてそれは私の考え違いだったことに気がつきました。寮母さんたちから優しく迎えられ、家では寝たきりの毎日でしたが、起きて食事をしてもめまいがしなくなりました。車椅子で広場でのリハビリにも出ます。また、働くことのみで歌など作ったことはないのですが、園長先生のすすめで短歌を作ることを覚えました。寮母さんのお昼の休憩時間を短歌作りに当てます。時間のたつのを忘れます。夜寝れぬ時も三十一文字に心の中を綴り、夜勤寮母さんに書きとめてもらいます。

こうして今では毎日が充実し、皆さん方のおかげだと思って、天寿を全うするよう努力を続けております。

四回めの五十四年の文化祭は少し進展を示した。弁論大会も続けられたが、新しく地元中学の郷土芸能保存グループ二十名が熱演奉仕をしたからである。利用者やその家族のみでなく、他の施設関係者や一般の人々を含めて、その日は四百五十名の大家族の文化祭に盛り上った。おそらく、来年からは町のお祭りの一つに加えられることであろう。私たちのホームの出発に当たったの構想は「コミュニティの中へ」ということであった。文化祭もまた巧まずしてその任を果たしていけそうである。

注1 この押花は五十四年の文化祭では大型の雌雄の孔雀に表現されたが、第六回大分県高年文化祭創作美術展に出品したら、特養部では唯一の入賞となって当の老人たちを驚かせた。寝たきりの人たちの共

同制作ということが評価されたのであろう。

(4) 旅に出よう

「特養ホームと旅」というと、余りにもそぐわない組合わせといわれよう。たしかに、ほかの特養で一泊旅行に出かけたという話を聞いても、私たちは何の感慨も抱かなかった。物好きな施設もあるものと思うだけだった。

しかし、四年たった時、老人にとっての旅がどんな意味をもつか、特に家郷を離れた特養の老人にとって「旅」のある生活が何であるか、任運荘は考えねばならなかった。ある詩人は、旅にあれば家を想い、家に居ては旅を思う、といっていた。特養の老人たちの心はいま家にいるのだろうかそれとも旅に出ているのだろうか。ともあれ、旅心は満たされねばならない。

『老人生活研究』(55・11月号)に登載された任運荘の「旅の記録」を見ることにしよう。

「もう一度 ふるさとへ」

特養に少しでも世間並みの生活をと考えながら五年たちましたが、旅もまたその一つの目標です。年寄りの旅心を満たすための「旅への誘い」プランは丸一年過ぎました。五十四年四月から翌年六月までに、日帰りの旅は十八回、現員五十名の老人たちのうち延べ百九名が参加しています。「日

表7 昭和54年5月～55年6月間の旅行実施表

年. 月. 日	目 的	参 加 数			場 所
		男	女	計	
54. 5.20	さかなつり	4	0	4	竹田市
6. 9	鐘乳洞見学	4	4	8	三重町
6.19	Aコープ買物	4	2	6	緒方町
9. 4	原尻の滝	1	3	4	同上
9. 8	荒平の池	0	5	5	同上
9.11	同上	0	5	5	同上
9.12	社会見学(役場外)	3	1	4	同上
10. 6	岡城めぐり	2	3	5	竹田市
10.12	もみじ見物	2	2	4	朝地町
55. 3.18	トキワ高齢文化展	0	2	2	大分市
4. 5	大正公園花見	9	24	33	緒方町
4.10	岡城花見(車椅子)	1	4	5	竹田市
5. 2	つつじ, 茶つき見学	1	3	4	大野町
5.10	同上	0	4	4	同上
5.22	いちごつみ	1	2	3	緒方町
5.24	同上	1	3	4	同上
5.29	九重高原つつじ見物	3	4	7	久住町
6.28	施設見学(階生園)	2	0	2	大野町
日帰りの旅 計18回		38	71	109	
54. 10.1～2	杉ノ井ホテル1泊	1	3	4	別府市
54. 11.1～2	長湯温泉1泊	2	3	5	直入町
55. 4.14～15	天カ瀬町里帰り	1	0	1	日田郡
1泊旅行 計3回		4	6	10	

帰りの旅」—おかしい言葉ですが、特養の病老人にとって数時間の外出も「旅」そのものです。

一泊旅行は三回、十名参加です。総計して一人平均二・四回の参加率です。参加していないのは病気で動かせない者二名と行きたくない人二名です。行きたくない人のうち一名は眼が見えないため、もう一人はよく自宅へ帰っているので施設行事を好まないため。

▼盆正月帰省のかげに

任運荘では盆正月の帰省を大切な行事と考え、半数以上の人たちが帰省して、家族の中に自分の座をたしかめ、心の平安を保っています。

しかし、帰省のかなわない人たちの気持ちを考えると、手放して帰省運動を喜ぶことができません。また、限られたホーム生活に、精神的にも肉体的にも要求が頻繁になります。さ細なことで暴力的になる人。入浴日等の多忙な時をねらって無断外出して、あわてて探す寮母の姿に快感を覚える人。いわれもなく他の老人たちに圧力をかける老女。夜勤寮母を妄想する者。女性の部屋に侵入する老人。これらの老人を問題老人と片づけてしまわず、親身に考えねばならないという気持ちが寮母室に強く流れ始めました。

その解決の一つとして、戸外散歩等に重点をおいたが、それが刺戟となったのか帰る家もない者でさえ、「一度でいいから住んでいた所を見たい」と望郷の想いを訴えます。たまたま五十四年にリフトバスが贈られたので、障害の重い老人たちでも旅に加わるようになりました。医師も「環境を変えることは身心を健やかにする」とすすめました。

▽水中鐘乳洞

第一回めは最近発見された鐘乳洞見学です。約三〇キロの道程を三台の車で八名参加、付添の職員は五名。特に今回はたえず問題を起す欲求不満の人たちを主体としました。

入場料五百円、めいめいが切符を買います。金を払うことの嫌なAさんも笑いながら首にかけた袋から小銭を探します。往復二キロ近い洞内を、万一のために車椅子を用意して祈る思いで入りました。水中に没していた洞だけに眼を見はることばかりです。

看護婦や寮母に抱えられながら歩き続けたBさん(八四)は出て来て、「あーよかった。どうなることか心配じやった」とホッとしています。昼食はレストランでメニューと金額をにらみあって注文します。

帰ってからの感想。―外に出て気分がすっきりした。若返った。自信ができた。疲れた、もう行かん、でもすばらしかった。外食は久しぶりだったので、一段と味がよかった。自分の金を出して食べると何となく楽しい等。

その翌日は回診日です。「おや、Bさんの表情が違いますね、心臓が快調」と聴診器を外しながら話しかけると、「ほら穴に捨てられてはと心配だった」と医師に話して聞かせます。重い痴呆症のBさんは洞内を歩いた必死の体験が、精神機能を少しよみがえらせたのか、誰もいないわが家なのに「帰りたい」と日に幾十回と繰り返す訴えがずっと減ってきました。

いつもいらしている耳の遠いCさんにもにこにこしています。しばらくはご機嫌が続きます。

第二回めは町内にある「原尻の滝」見物です。四キロの道程です。このことを放送で聞いたDさん（八七）はやっと終末状態から脱したばかりですが、「死んでもよいからもう一度見たい」と頑として聞き入れません。医師も「近いからゆっくり行けばよいでしょう」と許可。Dさんは「生まれた在所は何度来てもよい。生き返ったようだ」と、昔の川渡り祭の勇ましかったことを語ってくれました。

この一行は障害の重い人たちです。無事帰ったことに勇気づけられたのか、行きたいけれど体が不安だった人たちからも希望する声が出始めます。ホーム全体が何となく賑やかになります。

自力で動けない人たちが第三回、四回と続けられ、暑い夏は避けて、九月末から再開です。

動けないEさん（九二）は入所以来一度も帰省していない。Eさんの生まれた実家の前を車は徐行します。寮母の指さす方を見ていましたが、スーッと涙が頬を伝わっています。言葉で意志表示ができないのです。植物化しかけているがごとく見えても、住みなれた昔の家の思い出はよみがえっているのです。

毎日何をしているか分からないというもうろう状態のFさん（九二）は、「ここは昔女学校に通っていた所だ」とふしぎに覚えています。

強度の健忘症で自分の部屋を忘れてしまうGさんも、「あつ、ここは家庭訪問で子供たちと通った」と声を弾ませます。

「ああ、このお寺、おじいさんの葬式を頼んだところ、早く元気になってお詣りせねば」と手を合

わせるのはHさん（八二）です。こうして過去との巡り合いは老人の心をよみがえらせます。

Iさんは行事などばかばかしいといって相手にせずいつも欠席ですが、みんなの旅の話しを聞いて、故郷の公園を案内紹介したいからと申し出るようになりました。

▼宿泊の旅

こうした日帰りの旅は老人たちに何か自信を与えたようです。Jさんは、「わしは一度も別府の湯に行ったことがない。ばあさんが十年も寝こんで行けなんだ」と別府行きを訴えます。Kさんは面会の友人が老人クラブで旅行に行ったことを聞いて、行かせてくれと要求します。

常時介護を要する老人たちを泊りがけの旅に連れて行くなど想像したこともない。強い要望なので、医師の許可の出た人たちで実施することになります。費用は輸送車代以外は自己負担です。これは大切なことです。一泊旅行と聞いて希望者十名、自己負担と知らされて四名が中止、二名は病气、結局四名が参加します。

任運荘の初めての試みです。別府杉の井ホテル宿泊。翌日は自然動物園見物。「別府なら生きているうちにもう一度行きたかった」とLさんはいう。「子供がのうても幸せたい。若い時は苦勞の連続、やっと一息ついたら病気で倒れ、もうどこにも行けないと思っていたのに」と喜ぶMさん。

ホテルで入浴中初老の婦人たちと一緒にになった。「特養ホームの人たちでも旅行できるんですか」と驚いています。Bさんは痴呆状態ですが、「連れて頂けるなんて夢にも考えていませんでしたよ」とはっきり答えます。

小皿に食べやすくほぐす寮母の姿に、「まるで本当の娘さんか嫁さんのようですね」と、メイドさんが感心したような声をあげます。

この旅の経費はホテル代七千円、昼食代千円、入場料千円、計一万円たらず。一番嬉しいことはBさんが「何もしないでは勿体ない」といって、杖をつきながらおむつたたみに加勢するようになったことです。

▽柚子香る家郷

二回目の旅には自己負担は嫌だといっていた二名が参加を希望します。そのNさんは出身地の長湯温泉が希望です。長男は死亡し、その嫁は再婚しているので、家が荒廃しているだろうと気になっているのです。

来て見ると、庭先に柚子の実が黄色く熟れているではないか。Nさんは車椅子から伸び上るようにして柚子をもらっています。膝一杯もいであげると、その香りがむせかえるようです。すると、急に大声で泣きだしました。

それからのNさんは嫁の悪口をいわなくなり、嫁も新しい夫を連れて面会に来るようになりました。

この旅行の参加者は五名、症状は痴呆症二名、健忘症一、重度身障一、アル中一です。費用は旅館代六千百円、昼食代三百円、計六千四百円。

▽跡田さん決死の旅

跡田さんの故里は兄の住む日田地方です。しかし、ここから九〇キロ、久住山の中腹を越えて四時間を要する道程です。老いて病む者にとって余りにも遙かで、故里への夢は遠ざかるばかりでした。胃腹部膨満、顔面浮腫の重病の一人です。

しかし、テレビで「ふるさと天カ瀬町」を垣間見た跡田さんは、「死ぬ前にもう一度ふるさとへ」と激しく、身体をわなわなさせて訴え続けます。故里へ帰してあげたい、まちがえば死につながる旅、慎重な対策が重ねられます。

まず遠距離に耐える体力をつくること。それに応じているつもりでしょう、「起こしてくれ」「車椅子で外に出してくれ」と弱々しい声ながら意欲を示すのです。誕生会には自分で車椅子を運転して皆を驚かせます。一万円ほどの金を数えて、「日田に帰る旅費はあるもんね」と嬉しそうです。跡田さんはこのホームでは何の年金もない唯一の人で、ホームが支給する月三千円の扶助費のみが収入です。

医師の了解を得て、四月十四日と出発を決める。非常に危険な旅なので、中止も何度か考えたが「帰りついて死んでも本望だ」と泣いて頼む跡田さんを見ると、責任をとることになっても連れていこうということになりました。「死なん、絶対に死なん」と追いつがるようにいい続けます。

▽還り来る墓の前で

出発の朝です。医師より強心剤を打つことや道中に備えての指示、注意がなされます。サンソ吸入器、血圧計、車椅子も積み込みます。リフトバスにマットを敷き込み、跡田さんを横に休ませ、両手

を職員が握っています。玄関で見送る人たちから「元気で帰って来てね」と励まされ、かすかに口元をほころばせます。つきそう一行は事務長、指導員（女）、看護婦と責任のもてる体制です。幾度も停車しては顔色を見ます。

長行軍でも、故里が近づくにつれ蒼白だった顔に生気が戻り、天カ瀬町に入ると、「滝がある所を登る」とつぶやく。「さあ、跡田さん、私たちは知らんのだから、元氣出して道案内して」と抱き起こすと、不自由な手であっち、こっちと案内を始めます。やっと三時間半の長旅に耐え、懐かしいわが生家につくことができました。迎えの兄夫婦は涙ぐんで「寒くはないか」と一言。跡田さんは顔をくしゃくしゃにして声にならない挨拶を交わします。

夜になると、続々と近隣の人たちや親族が訪れ、会食が始まります。疎遠の年月は一挙に消え去ったようです。八十過ぎた老婆が「生きちよるうちにお前に会えようとは思わなかった。生きちよりさえすればまた会えるけん、頑張れよ」という。「兄は氣短かで酒飲みで実に恐かった」と暴露する妹婿。

「あんたは力持ちで力仕事をよく手伝って下さった。布団はいつ帰って来てもよいようにちゃんとしもうちよります」と兄嫁。「がきのおれん口に放りこんでくれた砂糖のおいしさは忘れられん」と語る若者。夜のふけるまで思い出はつきません。

不安だから泊ってほしいと家族に依頼されて、別室に休んでいると、深夜「できるだけ起こさんようにたしなめたけど、どうしてもあなたたちでなければときかないので、すみませんがお願いし

ます」と、そつと二回起こされる。こちらが恐縮してしまふ。跡田さんは肛門狭窄でガスも介助なしでは出ません。今夜は気持ちよさそうに大きな音を出しています。

翌朝、お墓が見たいと希望する跡田さんの声に皆で出かけます。地区民が出し合つて建立した見事な納骨堂を車椅子の上から拝みます。「あみだ様の左から三番目が跡田家じゃ」と肩を抑えられて、嗚咽はしばらくは止まない。お寺よりお念珠が手渡されると、「もう何も心配ないもんね」と再びしゃくりあげる。

午前十時、昨夜みなかった顔ぶれの友を交じえて何時までも手を振る人々に別れを告げました。夕刻、無事ホームに帰着しました。

こうして命がけの旅は終わりました。

跡田さんの顔からは、とげとげしかった表情は消え、あたり散らすのもうそのように消えます。おむつ使用を止めて、尿器介助になり、ナース・コールで知らせるほどの変貌です。

変化はあちこちで起こりました。宮原さん（八九）は故郷を諦めていた一人ですが、「わしも鳥栖まで頼もうかな」と、晩酌をしながら故里の民謡を歌います。「子供も死んだ、主人も戦死、自分は歩けない」とこぼしていた赤星さんは、「私は護国神社にお詣りしよう」と細い眼をさらに細めていいいます。跡田さんの旅はこうして明るい希望をもたりました。

(5) 効果はあがっているか

特養ホームで日課や行事に老人たちが参加することは、その日々の暮らしにどれだけの効果があるだろうか。

それを判定するために客観的基準を定めることは困難であるが、施設間を統計的に比較すれば、ある程度の測定ができるであろう。

この章の冒頭でみた石神氏の調査を一つの参考にすることができる。氏は長野県下全特養ホーム二十施設、千五百八十五人の入所老人の機能についてのアンケートをまとめて、平均値を出している。特養における処遇結果の評価は、入所老人の日常生活動作の自立の度合が高いほどよいことはいうまでもない。その立場からのAとBの施設間の対比であった。

ここで氏が示した長野県の特養全体の平均値をそのまま利用して、任運荘と数値的に対比さすことにしよう(表8)。大分県にはそうした調査がないからである。

まず、移動できる機能の度合について。「自力で歩行できる」のが施設外移動者であるが、両者間の差はない。

「施設内なら移動出来る者」に少し差がみられる。任運荘に少し多いが、十五人のうち二名は車椅子使用、十三人が歩行器使用となっている。器具使用をできるだけすすめているためだろうか。

表8 日常生活の自立度合の対比（長野県平均対任運荘）

1 移動機能の対比%（任運荘50人現員，実数も記入）

	施設外 移動者	施設内 移動者	居室内 移動者	腰掛座居 可能者	よりかか り座居可 能者	全く寝 たきり
長野県	19.3	22.3	6.0	12.7	11.8	29.1
任運荘	18 (9人)	30 (15人)	4 (2人)	16 (8人)	30 (15人)	2 (1人)

2 食事介助 %

	自 立	一部介助	全介助
長野県	62.9	27.5	9.7
任運荘	68 (34人)	22 (11人)	10 (5人)

3 入浴介助

	自 立	一部介助	全介助
長野県	14.6	20.2	65.0
任運荘	28 (14人)	24 (12人)	48 (24人)

4 排泄介助

	一般トイレ 自立	ポータブル 便器自立	便器介助	おむつ
長野県	27.1	22.5	5.3	49.1
任運荘	42 (21人)	12 (6人)	10 (5人)	36 (18人)

「居室内の移動」可能は、ベッドからポータブルトイレにやっと移動できる者一人である。

「腰掛座居のできる者」が少し任運荘に多いが、介助して車椅子にのせれば、自力で運転移動できるので、日課としてそれを行う者が八人で一六%。

「よりかかれ座居できる者」が大きく差があり、従って、「全く寝たきり」で逆に大きく開いている。任運荘では「全く寝たきり」は一人のみで、二%。長野県平均二九%。任運荘では寝たきりを作らないため、「よりかかり座居」を努力している結果から生まれている数字の差であろう。この座居は手がかかるが、老人の身体と精神に与える効果は大きい。天井だけを見る生活よりも起きて水平を見る生活がはるかに望ましい。人間の尊厳の意識に影響すること当然である。

「食事介助」について。数字の上では大差はない。ただ「自立」している者のうち任運荘では、三十四人のうち食堂に行っている者は二十一人、居室でベッドを離れてテーブルでしている者は二十四人、一人だけ他人と共にすることを好まない者がいる。だからベッドで食事するのは四人にすぎない。そのためには狭い室にも置ける折りたたみの特注テーブルを工夫しなければならなかった。

「入浴介助」については、差がみられている。「全介助」とは任運荘では機械による入浴介助であるが、半数近くの二十四人のうち全く何もできないのが三人だけで、残りの二十一人は自分の恥部だけでも洗う動作をしている。

「自立」の二八%には脱着衣すべてを含めて可能である。

最後に、「排泄介助」について。

長野県平均とは大きな差がみられている。「一般トイレで自力で可能」が任運荘は約二倍の自立度である。二十一人のうち自力歩行者は十人、歩行器使用は十一人。

「ポータブル便器を使用しての自立」は従って、任運荘は逆に半数となる。

「便器を使用しての介助」は任運荘では率の上では倍になっている。便器使用の排泄介助こそ「おむつ外し」のための重要な指標というべきもので、特養においては重要な処遇内容とされるべきであろう。介助の時間と時間をおむつ介助よりは多くかけねばならず、老人本人の自覚と努力も伴わねばそれは可能ではない。

したがって、「おむつ」介助は任運荘がそれだけ少なくなつて一三%の差がでている。その中でも十八人のうち六人は時々（昼間）尿器使用が含まれている。

概して、任運荘の方が自立度への方向は高い、といえよう。